

文芸の町、飯能の起源

—大正 10 年発行の同人誌『土香』と小鹿野竹治郎を中心に—

飯能市立博物館 学芸職員 波田 尚大

飯能は、文芸の町であると言えます。数多くの文人たちが訪れ、住み、交流し、様々な文芸が生まれました。『文芸はんのう』創刊号において町田多可次氏が「千家元麿と蔵原伸二郎」で千家と蔵原二人の詩人を中心に、大正 12(1923)年の関東大震災後に飯能に集まってきた文人たちのことを紹介しています。町田氏いわく「震災が、当時の日本詩壇の一部を飯能に移動させた感さもある」ほどで、それら文人たちの中に天覧山のふもとに居を構えた千家元麿と中居の宝蔵寺の住職となった中西悟堂がいました。

こうした文人たちが集まる中で創作活動が行われ、その成果が文芸誌や同人誌に掲載、発表されます。「飯能に於ける同人誌の嚆矢」と言われており、現存が確認されておらず、幻となっている同人誌『創造』には、千家と中西も寄稿していたことが町田氏によって報告されていますが、この同人誌を発行したのが小鹿野竹治郎という人物です。小鹿野は、洋服屋と質屋を営む商家で、金銭的に余裕があったため、飯能に集まった年若い文人たちの衣食住の世話をしていたといえます。小鹿野は、集まった文人たちの一人である牧野吉晴の、飯能での生活を基にした小説「青山白雲」に登場する「鶴野登茂吉」のモデルとなっており、未完の自伝的小説「閻魔の前で」にも登場します。

先日、飯能市柳町在住の古写真蒐集家の大野哲夫氏が、前述の『創造』刊行以前の大正 10(1921)年に飯能で発行された同人誌『土香』(画像 1)を発見したことの報告と、これについての調査依頼がありました。『土香』の書誌情報は表 1 の通りで、前述の小鹿野は創作小説「金時計」を寄稿し、編集にも携わっていました。また、震災によって文人たちが集まる以前から自分たちで同人誌を発行するなど、飯能では文芸が盛んに行われていたことが明らかになりました。これらのことから、小鹿野は飯能における文人たちのパトロンとして、同人誌の発行者として、文芸

の町、飯能の起源に深く関わっていた人物だと言えます。

小鹿野は大正 14(1925)年頃に「本気になって文学をやる」ために夫婦で上京したものの、昭和 8(1933)年 12 月 23 日に亡くなっています。野口種苗研究所の野口勲氏によると、小鹿野の遺骨は交流のあった詩人・僧侶の赤松月船が預かっていたようで、飯能にはいまだ帰ってきていません。

表 1 『土香』第 1 巻第 1 号の書誌情報

編集	土肥 東天紅・武久 勝彦・ <u>小鹿野竹治郎</u> ・齋藤 拾
編集兼発行者	埼玉県飯能町大字飯能102 武久 勇三
印刷者	田中貞助
印刷所	埼玉県飯能町 一誠堂印刷部
発行所	埼玉県飯能町 土香社
印刷	大正10(1921)年2月21日
納本	大正10(1921)年2月22日
発行	<u>大正10(1921)年2月28日</u>

【参考文献】

文芸はんのう編集委員会『文芸はんのう』創刊号 飯能市教育委員会 昭和 56(1981)年 2 月/『官報』昭和 9(1934)年 2 月 3 日[国立国会図書館デジタルコレクション]より / 牧野 由晴『青山白雲・閻魔の前で』創人社 昭和 46(1971)年 9 月/野口 勲「飯能 JC 時代①/「ミニニュース飯能」から『緑のまちと市民たち』」『野口のタネ/野口種苗研究所』ホームページ